

カンボジアの国と体育事情

大橋 美勝・小原 信幸*

ポル・ポト政権によって破壊された悲惨なカンボジアの社会状況と貧困な学校体育の実情について報告する。

Keywords : カンボジア, ハート・オブ・ゴールド, 学校教育, 学校体育

はじめに

アンコールワット国際ハーフマラソンは、アンコールワット遺跡内で行われる国際チャリティーマラソンである。対人地雷で手足を失った被害者に義足を贈ることを目的にして、1996年12月から始めた。このマラソンに、五輪メダリストの有森裕子さんが参加した。それが発端となって、「すべての人々に希望と勇気を！」をスローガンに、2年間の準備期間を経て、1998年10月10日に、彼女を代表理事とするNGO（非政府組織）ハート・オブ・ゴールド（HG）が設立された。

その目的は、生活自立支援に協力するとともに、子ども達が生きていく勇気と希望を持つ機会を設けて心のケアをしていくことである。このためにHGは、マラソンの開催と運営支援、そしてそれによる対人地雷被害者支援はもちろんのこと、今では現地の要望に応える形で、孤児支援、日本語教育活動支援等へと活動の幅を広げ、さらに設立3年後の2001年には、世界でも珍しい「スポーツを通じた開発」の実践団体として、マラソンに限らず青少年の各種競技や武道等の指導者育成支援活動を展開してきている。^(注1)

そして現在は、カンボジアのすべての子どもたちの健やかな成長を願って、「小学校保健体育科学習指導要領」の作成の支援をしてきた。岡山大学教育学部保健体育講座も、NGからの要請で、これまで3人の研修生を受け入れ、間接的ではあるが携わってきた。

そんな関係から、この度、HG企画による「第1

回日カン交流研修ツアー」(2008, 1, 11~1, 14)に参加する機会を得て、多くのことを学んできた。本稿は、カンボジアの事情を多くの人達と共有し、支援の道につながっていくことを願ってのものである。

1. カンボジアという国

1. 地理^(注2)

東南アジアで最も小さな国で、人口は東京の10分の1強の約1400万人、首都プノンペンに約200万人が住んでいて、95%が仏教徒で、人口の約80%が農業である。

高温多湿な熱帯モンスーン気候に属し、気温は、最低16度、最高39度、平均27度で、11月から4月が乾期、5月から10月が雨期である。この雨期の間に、お米を2回作る二期作である。農法は昔ながらの水牛で、農業技術者はまだ少ない。

2003年にプノンペン国際空港が新しく大きな素晴らしい空港になった。また、アンコールワット等が世界遺産に登録されて以来、プノンペンだけでなくシェムリアップに、仕事を求めた人々が集まり人口が増えつつある。

2. 歴史^(注3)

1953年にシアヌーク国王のもと、王国としてフランスから完全独立した。しかし、ベトナム戦争のあおりやクーデターなどが相次いで、国内の混乱が続いた。その混乱の中で1975年にポル・ポト政権が成立し、それ以来ベトナムとの関係を悪化させ、さらに内戦によって、この国の社会の仕組みはほとんどが破壊された。

岡山大学大学院教育学研究科 生活・健康スポーツ学系 700-8530 岡山市津島中3-1-1

*吉備国際大学 716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

Circumstances of Nation and Physical Education in Cambodia

Yoshikatsu OHASHI and Nobuyuki KOHARA

Division of Life, Health Sport, Graduate School of Education, Okayama University 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

*Nobuyuki Kohara Kibi International University Takahaisi Igatyo 8 Okayama 716-8508

毛沢東思想の影響を受けて極端な共産主義を実現しようとしたポル・ポト政権は、教育、文化、信仰を全部否定し、政治家、公務員、教育者、医者、技術者、芸術家、文化人等々、当時の人口の3分の1にあたる約200万人を虐殺したのである。それゆえ、現在人口約1400万人のうち、15歳以下が半数以上を占め、50歳以上は1割に過ぎない。

ポル・ポト政権は1979年にベトナムによって倒されたが、その後内戦が続き、シアヌーク国王のもとに新生カンボジア王国が誕生したのは1993年9月24日である。そして、2004年10月に国王の子息のシアモニ殿下が新国王に即位し、新しい社会の秩序づくり、仕組みづくり、国づくりが手がけられ始めようとしている。しかし、自力での復興が不可能なくらい人材不足に陥っている。

我々がカンボジアを訪問したのが2008年1月であるから、僅か3年と3ヶ月前のことである。

3. 政治^(注4)

しかし、一旦無秩序になった社会は、そう簡単に秩序づけられるものではない。

現在、カンボジアには、中国や韓国の企業がどんどん進出してきており、国会議員が国の土地を売って、これらの企業を誘致するとともに、企業と手を組んで、私欲に走り、先取り勝ち、やりたい放題といった感じである。

そして、儲けたお金が、一部の金持ちや議員に吸い取られていってしまっている現実にある。

税金が国に入る制度にしていかないと、国にお金が入ってこないため、国として何も施策を実行していくことができないが、そう分かっていても、このような制度にすると、国会議員のふところにお金が入ってこなくなるので、国会議員自身が変えようとしない。

もうすぐ選挙がある。にもかかわらず、政権は変わらないだろうと言う。その理由は、「このような悪い政府でも、もし倒れたら必ずまた内戦が起こる。30年前の戦争時代には戻りたくない。だから悪くても今の方がよい」と考えているからである。

国会議事堂のすぐ横に「カジノ」ができていた。信じられないことであるが、国会議員がしていること。また、他にもカジノがあちこち建設されていて、ベトナムの国境付近のカジノにはベトナムからの富豪で栄えているということであった。

4. 都市^(注5)

カンボジアに入るとき、ビザは飛行機で降りた空港で申請する。

首都プノンペン、シェムリアップはカンボジアの二大都市で、旅行者は両都市とも通過は許されず、1泊以上滞在することが義務づけられている。

世界遺産のアンコール・ワット、アンコール・トム等があるシェムリアップは、世界遺産に登録されて以来、観光客はプノンペンには寄らずに直接シェムリアップに行くようになり、そういう人達が年々急増している。

政府は国の公共施設や国の公園等々を売り、シェムリアップにはホテルが乱立して、カンボジアに来たのではなく、ヨーロッパやアメリカの街に来たような錯覚に陥るほど、洋風のホテルや店が建設されつつある。

このようなホテルの乱立で地盤沈下を起こし、世界遺産にも影響を与えることが心配されている。

また、まさにバブルで、土地の価格が急騰しつつあり、その影響を受けて地方の田舎の土地さえも値上がりしているので、さらに値上がりするのを待つて、地方の土地もなかなか売ろうとしない。

5. 交通^(注6)

公共の交通機関は、バスも電車もタクシーも、何もない。交通手段のない観光客等は、自転車タクシー、オートバイのシートが少し長いオートバイタクシー、バイクの後ろが4人乗りになっているトクトクを使用する。帽子を被っているからすぐわかるので、お客様が声をかけ、料金は交渉で決める。

普通一般の人の交通手段は、自転車、バイク、自動車で、町中は自動車とバイクでごった返している。

バイクは免許を取る必要はないので、多くの人が通学にも出勤にも生活にも使用している。1人乗りではなく2人乗りが普通くらいのよう多く、3人乗りもいる。乗れるなら何人乗っても構わないからである。そして何と、母親が自分とハンドルの間に子どもを2人、後ろに2人乗せて、合計5人で走っている光景もあった。

自動車の運転には、免許が必要である。カンボジアの自動車は、全部外国からの中古車の輸入である。輸入車の30%は事故をしていない車であるが、70%は事故車である。どういう訳か、トヨタのカモリが一番人気で、次がカローラであった。

また、信号は都市の町中にも、まずないといつてよいくらい少ない。

そのため、ラッシュアワーだけでなく絶えず、車とバイクがウジャウジャといった感じで、空いていればどんどん進入してくるし、信号がないから、右折も左折も大変で、先に入った者勝ちである。しか

も、そこを横切る人がいるのであるから、怖くてとても運転できそうにない。

路上駐車も結構多く、交通の妨げになっている。でも夜になると、全部路上から姿を消す。昼間、生活に使っていた部屋が、夜になると車庫になり、そこに車をしまう。そうしないと車ごと盗まれたり、部品を盗られてしまうからである。

6. 水道・下水道・電気^(注7)

水道は井戸からの水道で、都市のほんの一部でしか敷かれておらず、あとは全部井戸水を汲み上げている。

また、これらの水道も井戸水も、生では飲むことができない。ホテルでの歯磨きやうがいも、携帯したミネラルウォーターを使用した。

下水道もない。そのため生活用水は垂れ流しで、都市の川は浮遊物で溢れている。雨期の洪水のような雨によって、海に流すのだろうかと思うくらいである。

電気も都市のほんの一部で、学校もどこの家も、自動車のバッテリーによる自家発電が普通である。

II. カンボジアの学校教育

1. 教育制度^(注8)

(1) 学校制度と進学率

学校の教育制度は6・3・3・4制であるが、義務教育はない。

7歳が一応小学校1年生に入学する年齢であるが、その年齢の時に入学できないで、何年も経つてから入学する子どももいる。

小学校6年生の時に卒業試験がある。落第する子どももいる。

小学校を卒業して、中学校に進学する子どもは50%である。そして、中学校に進学して、中学校の終わりまで行ける子どもは、プノンペンで90%，その他の地域では50%である。すなわち、地方で中学校の終わりまで行ける子どもは、全体の子どもの25%である。

このように少なくなるのは、行きたいけれども生活のために働くしかならなかつたり、近くに学校がなかつたり、先生がたりないからである。

中学校卒業後、高校に進学できる子どもは、プノンペンで70%である。

しかし、地方では中学校を卒業したら、高校には進まないで働くというのが普通である。そのため、小学校を卒業した子どもの25%は中学校の終わりまでいくけれども、75%は進学しないで働くようになる。

(2) 学校数と経営

ポル・ポト政権時代に、ほとんどの学校が破壊されてしまった。そのため学校は、これから建設していかなければならない。

しかし、企業は少ないし、あっても外国の資本で、一部の者によって利益が吸い上げられ、国に税収入が入ってこない。そのため国にお金がないので、学校も建てることができない。

建てられても外国からの支援によるところが大きく、その後は学校長にすべての采配が任せられている。学校長は転勤はなく、自分の采配でどうにでもしていいけるといえば聞こえがよいが、どうにかしていかなければならない存在が学校長なのである。

したがって、あらゆるところから予算を取ってきたり、NGO等々から援助してもらえるようにしていく手腕が、学校長の大きな仕事である。

また、あまりにも学校がたりな過ぎるので、午前と午後の2交替制になっている。児童が午前と午後で入れ替わるのである。

2. 学校の教員

(1) 教員の資質

先生方は、ポル・ポト政権時代に子どもで田舎に逃げていて生き延びた人達であるため、校長先生を含めて皆若く、ほとんど全員が高校卒である。校長先生も高卒であった。

現在は4年生の大学ができる、大学卒業後さらに2年間勉強すれば先生になれる制度ができている。いざれはこういう人達が先生になっていくことが、真に願われている。

(2) 教員の給料

都市部では月100ドル以上なければ家族を養えないので、先生の給料は、1ヶ月40ドルから45ドルである。(1ドル120円として4,800円ということになる。)

学校は2交替制なので、先生は昼食を摂りにバイクで家に帰る。午前と午後で2回家と学校を往復する。同じ道路を1日に4回走ることになるが、給料は1日に換算すると、そのガソリン代にもならない。給料だけでは生活していくことができない。それほど安すぎる給料である。

校長先生もそうで、「奥さんが働いているから、何とか生活できている。自分は、こんな給料でも、子どもの教育が大切だから、若い頃からずっと校長をしている」とのことであった。

先生方は生活していけないので、下記のようなことをしている。

・子どもたちから1ヶ月500円ずつ集めている。

(給料4, 800円+@500×30人=19,800円になる。)

子どもの母親は、先生の給料が月4,800円では生活できないことが分かっているし、自分の子どもにちゃんと教えて欲しいし、払わないで成績に影響するといけないので払っているのであって、それが今では当たり前のことになっている。

・子どもたちは朝5時半から6時頃に起きて、6時50分には登校する。家で朝食を食べないで学校に来るので、朝1時間目が終わると朝食で、子どもたちは学校の売店や学校の近くの屋台で、おかゆやうどん等を食べる。先生の中には、こういう朝食やおやつの時に、自分が用意した物を子どもたちに売る先生もいる。

・また、放課後、先生がアルバイトでお金をとって、子どもたちに教室で教えることもしている。

・それだけではなく、子どもが6年生の卒業試験で落第すると困るので、カンニングをしても見て見ぬ振りをしてくれるよう、裏金を渡す親がいて、それを受け取る先生もいる。

先生という職業は、こういうことまでしなければ生活していくしかない安月給であるため、たとえ4年生の大学卒業後さらに2年間勉強して教師の資格を取っても、先生にならないで他に就職してしまう現状にある。

ちなみに通訳ガイドは、先生の給料の30倍で、先生の給料の1ヶ月分を1日で稼いでいるのである。^(注9)

III. カンボジアの小学校教育

1. 教室と子どもたち

シェムリアップにあるチェイ小学校（児童数825人、教員18人の中規模校）を訪問した。幼稚園から小学校1年生の教室、そして6年生の教室に至るまで、どの教室にも正面の上の壁に、国王と王妃の写真が掲げてあって、如何に国王を崇め大切にしているかがわかる。（写真1）



写真1
教室の国王と王妃の写真

教室はたりないために、どの教室も子どもたちでギッシリ（1学級32人）で、草でつくった仮設の教室で勉強している子どもたちもいた。しかし、どの子もきちんと机に向かい、目をキラキラ輝かせて授業を受けていた。

休み時間になると、外に出てきて自由に遊びだし、とても人なつっこい、純粋な子どもたちであった。（写真2）

しかし、体は小さく、明治時代の頃の日本の子どもの状態とのことであった。^(注10)



写真2
人なつっこい子どもたち

2. 授業^(注11)

チェイ小学校では、国語、算数、歴史、礼儀、歌（国歌）、5年生からお経等々がなされている。

また、特別コースとして、アメリカの支援で英語コース（192人）、日本のNGOのHG（ハート・オブ・ゴールド）の支援で日本語コース（3つのコースに分かれている68人）がある。これらの特別コースは、校長先生の裁量で設置されたものである。

体育の授業は週2回とされているが、この小学校では、校長曰く、「授業としてはしていない。自由にやってもらっている」ということであった。運動の施設も学校の庭だけで、運動場もなかった。カンボジアでは、大抵どの学校もこういう状況で、ほとんどの学校で体育は授業としてはしていない。

IV. カンボジアの小学校保健体育科学習指導要領と体育の授業

1. 学習指導要領の作成の仕方と普及の仕方^(注12)

2007年6月に小学校保健体育科学習指導要領が作成され、教育省もこれを公認した。JICA草の根技術協力支援パートナー型を通じたHGの支援（筑波大学教授陣からの専門技術協力や岡山県の招聘制度を含む）を受け、教育青年スポーツ省内 指導要領策定担当 学校体育スポーツ局が、小学校の保健体育科の目標、内容並びに授業の進め方を、小学校教員に広く周知するために策定したものである。

カンボジアには現在小学校が約6,400校ある。これらの小学校に広めていくために、今、指導書を作成しているところである。そして、研究指定校を27校設け、そこが中心になって広めていこうとしている。

研究指定校で学習指導要領を具体化し、それを研究指定校にならなかった学校の先生が見に来て学び持ち帰るという方法である。

しかし、学校はこういう施設を持てという基準がないために、グラウンドさえない学校がほとんどであるし、ボールをはじめとする運動用具もないのであるから、指導要領の具体化と普及は多難である。

2. 研究指定校の体育の授業^(注13)

先述したトゥコーケ小学校は研究指定校の一つで、1年前から本格的にスタートした体育の授業を参観することができた。しかし、運動用具がないため、用具を必要としない徒手体操や簡単なゴム紐や縄を使った授業であった。

(1) 運動の内容

我々が視察に行った関係から、多くのクラスで体育の様子を見せてくれた。その様子は、

- ・日本のグラウンドというよりは、まさに学校の庭という感じの校庭に間を開けて整列し、
- ・両足を閉じたまま、片腕を伸ばして挙げたり、手を組んで両腕を伸ばして挙げたり、片腕を挙げながら上体を斜め上にねじったり、両手首を曲げて肩につける・・・といった上肢の運動を中心としたストレッチ的な徒手体操から始まった。(写真3)



写真3
ストレッチ的な徒手体操及び登校時の服装

しかし上肢を中心としたものであって、下肢や体側、上体の前後、胴体、跳躍といった体操はなされていなかった。

・この体操のあと、多くのクラスがゴム跳びを始めた(写真4)。1列に並んで、低い位置からだんだんと高くしていっていたが、腰くらいの高さ止まりであった。

・長縄跳びをするクラスも2クラスあった。回す方もうまく回せないし、入る方もタイミングが難しそうで、1回1回途切れていた。しかし、跳んでいる子も見ている子も、実に楽しそうであった。(写真5)

・また、思い思いの自由遊びに移っていくクラスもあった。

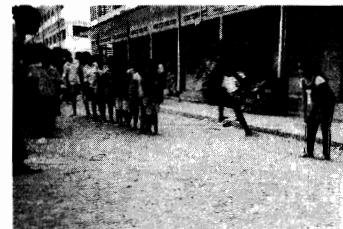


写真4
ゴム跳び

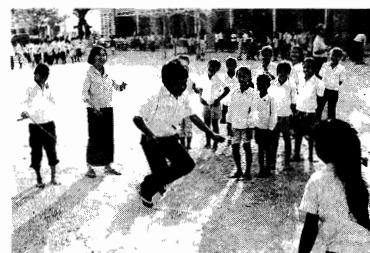


写真5
長縄跳び

(2) 服装(写真4・5)

スポーツウェナーに着替えている子どもはいないくらいごくごく僅かで、ほとんど全員の子どもたちが通学の服装のままであった。

また、スポーツシューズを履いている子どもは皆無で、履いていてもサンダルで、ほとんどの子どもが途中で脱いでしまい、裸足でていた。

(3) 教師の服装(写真3)

教師の服装は、体育の授業の時も、通勤の時の服装のままであった。服も靴もそのままで、しかもハンドバッグを肩に掛けたまま、子どもたちに口で指示を与えて運動をさせていた。

校長室はあるけれども職員室はない。教室がたりないから、職員室より教室を優先しているためである。

しかも、自分が担任をしている教室にも、更衣室や貴重品ロッカーがない。

そのため着替えれないし、ハンドバッグを教室に置いたままだと盗まれる危険性があるので、体育の授業中でも持ち歩いているのである。

また、それ以外にも、先生方そのものが、これまでスポーツウェアやスポーツシューズで運動やスポーツをした経験がないし、購入するお金のゆとりも

ないことも大きな原因である。

(4) 体育の授業終了後

体育の授業が終わったら、子どもたちは裸足のまま、手も洗わず、うがいもせず、汗だらけ砂だらけ埃だらけの服のまま教室に入っていた。

学校に水道が来ていないからである。井戸はどこかにあるのであろうが、多くの子どもが一度になると、無理な話である。

(5) 誇りのバスケットボールチーム

この体育の授業をしている隣で、女子のバスケットボールチームが練習していた。

体育の研究指定校になったため中古のバスケットボールボードと中古のボールが手に入ったからである。

プロンペンでの大会に向けて練習しているのだと、誇らしげに校長先生が語っていた。^(注14)

しかし、コンクリートのコートで、しかも裸足で練習していて、よく足を怪我しないなど驚かされた。(写真6)



写真6
コンクリートコートと裸足

考察

カンボジアが自力で再建できないくらい、こんなに悲惨な状況にあるとは、全く知らなかった。自力で再建していくように強力な支援が切望されるが、そのためには、

<第一>に何と言っても人材の育成が重要である。

人材の育成とは、次の時代を担う子どもたちを育てていくことであるが、まずは、そういう子どもに育てる「教師の養成」と「教師の資質の向上」から手がける必要がある。

研究指定校でしていた体育の授業は、作成された体育の学習指導要領を具体化していくために、HGが日本から指導者を派遣し、教えたことをしていた。これは教えたことが生きていることを意味している。

したがって、これからも、

- ・用具を必要としない体操、体ほぐしの運動、リズムダンス、運動あそび・・・等々や

- ・用具を用いるにしても、少ない用具で手軽に楽しめる運動あそびやゲームを紹介し、

- ・「体育の授業の進め方」も含めて教え、普及していく手助けをしていくことが求められる。

<第二>は教育に必要な物品の調達である。

今回カンボジアに行った時に教育省を訪問し青少年スポーツ局長に1054個の中古のボールを寄贈した。(写真7)

HGが岡山県内の関係者に呼びかけて寄付してもらったものであるが、とても有り難く感謝された。こういう援助なら誰も手軽にできることである。

<第三>はその教育を行う場としての学校や体育施設の建設である。プロンペンで三つのマンモス校のうちの一つである『トゥコーク小学校』(生徒数6,000人)を訪問したが、その校舎の壁面には、建設支援をした外国政府やNGOへの感謝の言葉が書かれていた。(写真8)

こういう資金の調達のためには、世界のもっともっと多くの国々や人々が、悲惨なカンボジアのこういう現実を知ることから始めなければならない。そのためには、直接行ってカンボジアの現実を見聞することが第一であるが、皆が行けるわけはないので、マスコミ等で何回も何回も大々的に取り上げて、広く知らせていくことが求められる。



写真7
中古のボールの寄贈



写真8
感謝の建設支援国・団体名

<注>

(注1) 特定非営利活動法人 「ハート・オブ・ゴーランド」パンフレット
草の根技術協力事業・パートナー型
カンボジア小学校体育科指導書作成支援プロジェクト
プロジェクト ペイパー

(注2) 通訳ガイド

(注3) 通訳ガイド
ワールドガイド「ベトナム アンコールワット」JTBパブリッシング p188

(注4) 通訳ガイド

山口 拓 (HG アジア地域事務局所長)

(注5), (注6), (注7), (注8) 通訳ガイド

(注9), (注10) 田代邦子 (HG 事務局長)

(注11) チェイ小学校校長

(注12) 学校体育スポーツ局長

(注13) 授業観察

(注14) トゥコーク小学校校長